

平成29年度  
宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国 語

注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は、板書されている時間割のと通りの50分間です。
- 3 問題数は大きな問題が4問で、表紙を除いて10ページです。〔四〕は記述問題です。
- 4 解答用紙は2枚で、答え方はマークシート方式と記述式です。
- 5 監督者の指示にしたがって、試験開始前にマークシート冊子から解答用紙を切り離し、受験番号のマーク欄を確認後、氏名を決められた欄に書きなさい。
- 6 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名を記述用解答用紙の決められた欄に書き、さらにバーコードシールを決められた枠の中に貼りなさい。
- 7 答えは、それぞれの解答用紙に記載されている注意事項にしたがって、ていねいに記入しなさい。
- 8 試験中に質問があれば、手をあげて監督者に聞きなさい。
- 9 監督者の「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおきなさい。

— 1 —  
次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「多重人格」は今アメリカで患者数数十万というところでもない「流  
行病」である。これを「幼児期の虐待」によって説明するのが今の  
「定説」である。療法は、抑圧された幼児記憶を再生させて、否定  
された自己を蘇よみがえらせ、多重化した人格を統合することをめざす。

これは「自己とは何か」という問題について、危険な予断を含ん  
でいると私は思う。最終的に人格はひとつに統合されるべきである、  
という治療の前提を私は疑っているからである。「人格はひとつ」な  
らぬ、誰が決めたのだ。私はパーソナリティ（人格）の発達過程と  
は、人格の多重化のプロセスである、というふうと考えている。幼  
児にとって世界は未分化、未分節の混沌こんとんである。幼児にとって世界  
との接点は（ a ）粘膜であり、その対象は人間であれ、食  
物であれ、「快不快」を軸にカテゴライズ（分類）されている。もう  
少し大きくなると、ある人間と別の人間では、メッセージに対する  
受容感が異なることに気づくようになる。コミュニケーションを  
うまくすすめるためには、相手が変わるごとに、発声法や、言葉遣  
いや、語彙ごいを変えたほうがいい、ということを学習する。

（ b ） 母親に向かって語りかける言葉と、父親に向かっ  
て語りかける言葉は、別の「ソシオレクト（注1）」に分化しそれぞれ発達  
してゆく。コミュニケーションの語法を変えらるということとは、  
（ c ） 「別人格を演じる」ということである。

**A** 相手と自分の社会的関係、親疎、権力位階、価値観の親和と  
反発……それは人間が二人向き合うことに違う。

**B** そのような場面ごとの人格の使い分けをかつては「融（注2）通無碍（注2）」  
と称した。

**C** 場面が変わるごとにその場にふさわしい適切な語法でコミ  
ュニケーションをとれるひとのことを、私たちは「大人」と呼  
んできた。

**D** その場合ごとの一回的で特殊な関係を私たちはそのつど構  
築しなければならぬ。

それが「成熟」という過程の到達目標のひとつであったはずであ  
る。（ d ） 近代のある段階で、このような「別人格の使い  
分け」は、「 I 」とか「裏表のある人間」とかいうネガ  
ティブな評価を受けるようになった。単一（注3）でピュアな「統一された  
人格」を全部の場面で、つねに貫徹することが望ましい生き方であ  
る、ということが、いつのまにか支配的なイデオロギ（注4）となったの  
である。

「本当の自分を探す」、「自己実現」というような修辞（注5）は、その背  
後に、場面ごとにばらばらである自分を統括する中核（注5）的な自我がな  
ければならない、という予断を隠している。その予断ゆえに、今、

私たちの社会は、どのような局面でも、相手の周波数に合わせて「チューニングする」能力がなく、固定周波数でしか発信することができない、情報感度のきわめて低い知性を大量に生み出している。「中枢的で単一の自我」を理想とするイデオロギーは、「カルト」や「マニア」への社会の細分化と構造的には同型である。

社会集団は「同質的で、単一で、ピュアであるべきだ」という危険なイデオロギーを声高に批判する人々がなぜ「自我は同質的で、単一で、ピュアであるべきだ」という近代の自我論を放置し、しばしば擁護する側にまわるのか、私にはうまく理解できない。

いまの社会では、「自分らしくふるまえ」、「自分の個性を全面的に表現せよ」といった「**II**」ことに対するきびしい禁忌が幼児期から働いている。そのような社会では、「ある局面においての私」と「別の局面での私」というものを切り離す能力は育たない。そして切り離せない以上、「もつとも傷つきやすく、もつとも耐性に欠け、もつとも柔軟性を欠いた私」なるものがあらゆる場面でまっさきに露出してくることは避けられないのである。

最近の若い営業マンの中には、仕事上のささいなミスを注意すると、**③**血相を変えて怒るものがある。それが商取引という限定的な人間関係におけるできごとである、ということが理解できず、業務上の失態についての注意を自分の全人格に対する攻撃であるかのように受け取るからそういうことがあるのである。この症状は「限定され、断片化された『私』」を**④**便宜的に演じる「訓練ができていない

ことに由来する。

例えば、「妻らしく」「女らしく」「娘らしく」……といった一連の「らしさ」の否定とは、要するに「最終的に収斂すべき、単一の、かけがえのない、中枢的『私』」という幻想なしには、成立しえない。それがどれほど危険な幻想であるか理解している人はおそらく少数だろう。

私がインターネットであれこれと持説を論じたり、私生活について書いたりしているのを不思議に思ってたか、「先生、あんなに自分のことをさらけだして、いいんですか？」とたずねた学生さんがいた。あのね、私のホームページで「私」と言っているのは「ホームページの内田樹」<sup>たつる</sup>なの。あれは私がつくった「キャラ」である。あそこで私が「……した」と書いているのは、私が本当にしたことの何万分の一かを選択し、配列し直し、さまざまな嘘やほらをまじえてつくった「お話」なのである。「私」はと語っている「私」は私の「多重人格のひとつ」にすぎない。そういう簡単なことが分からない人がたくさんいる。私が匿名でものを書かないのは、そのせいである。私は匿名で発信する人間が大嫌いだけれど、それは「卑怯」<sup>ひきょう</sup>とかそういうレヴェルの問題ではなく、「本名の自分」というものが純粹でリアルなものとしてどこかに存在している、と信じているその人の**⑤**妄想のありかたが気持ち悪いからである。私は「内田樹」という名前前で発信してまるで平気である。それは自分のことを「純粹でリアルな存在」だと思ってなんかいないからである。

(内田樹「『おじさん』的思考」から)

- (注1) ソシオレクト||特定の社会層で使用される言語
- (注2) 融通無碍||考え方や行動にとらわれることなく自由であること
- (注3) ピュア||純粋なこと
- (注4) イデオロギー||人間の行動を決定する考え方
- (注5) 中枢的な||中心的な。中核となる
- (注6) 「カルト」や「マニア」||特定のものに対する熱狂的態度
- (注7) 禁忌||社会的に厳しく禁止されている特定の行為
- (注8) 収斂||まとまること

問一 ① 混沌、④ 便宜的にの本文中での意味の組み合わせとして適当なものかどうか。

- ア 「① 区別がつかない状態」 ④ 都合のよいように
- イ 「① はつきりしない状態」 ④ いつもと変らずに
- ウ 「① 困り果てた状態」 ④ 状況にあわせて
- エ 「① 手つかずの状態」 ④ 限られた中で

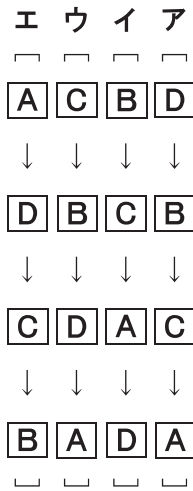
問二 ( a ) から ( d ) に入る語の組み合わせとして

て適当なものかどうか。

- ア 「a いわば b しかるに c もっぱら d 例えば」
- イ 「a しかるに b もっぱら c 例えば d いわば」
- ウ 「a もっぱら b 例えば c いわば d しかるに」
- エ 「a 例えば b いわば c しかるに d もっぱら」

問三 本文中の A から D の文を正しい順序に並びかえたものは

どれか。



問四 I に入る言葉として適当なものかどうか。

- ア 優柔不断
- イ 面従腹背
- ウ 主客転倒
- エ 表裏一体

問五<sup>②</sup> 相手の周波数に合わせて……受発信することができない、とあるが、それはどのようなひとと考えられるか。適当なものを次から選べ。

- ア 特殊な関係をそのつど構築しようとしているひと
- イ コミュニケーションの語法を変えることができないひと
- ウ 中核的な自我を持つことができないひと
- エ 「ある局面においての私」を切り離す能力のあるひと

問六 Ⅱ に入る言葉として適当なものはいずれか。

- ア 自他をわきまえず自己本位になる
- イ 「らしさ」を否定する
- ウ 自我を断片化して使い分ける
- エ 理想的な自分を追求する

問七<sup>③</sup> 血相を変えて怒るとあるが、このような状態をあらわす慣用語として適当なものはいずれか。

- ア 顔から火が出る
- イ へそを曲げる
- ウ 身の毛がよだつ
- エ 目を三角にする

問八<sup>⑤</sup> その人の妄想のありかたが気持ち悪いとあるが、筆者がそう考える理由として適当なものはいずれか。

- ア 匿名で発信する人は、中核的な自我がどこかに存在すると考えているから
- イ 匿名で発信する人は、「自分自身」を局面によって使い分けていると考えているから
- ウ 匿名で発信する人は、自分の意見に対して責任を負わないですむと信じているから
- エ 匿名で発信する人は、「本当の自分」をうまく演じられていると信じているから

問九 本文の中で述べられている内容と合わないものはどれか。

- ア 筆者自身は、ホームページ上での「私」は自分の「多重人格のひとつ」ととらえているので、インターネット上でも匿名では発信しない。
- イ 「別人格の使い分け」という行為に対して後ろめたさを持つ今の社会では、「統一された人格」を貫徹することが望ましい生き方だと考えられている。
- ウ 「限定され、断片化された『私』」を演じる訓練ができていないため、ささいなミスの指摘であっても人によっては、それを自分の全人格に対する攻撃ととらえてしまう。
- エ まだ世界が分化されていない幼児期には、対象を「不快」を軸にカテゴライズしながらも、相手が誰であれその受容感度を統一させている。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「彼女」は、突然家出をして警察に保護された「息子」を追って一人で福井まで来ている。「彼女」は息子をタクシーに乗せて連れて帰ろうとするが、逃げられそうになる。そこで、タクシーの運転手の勧めに従い、「息子」の気持ちを落ち着かせるために温泉に寄り道をすることにした。

——いつの間にか、遠くへ行こうとしている。日本海を眺めながら、彼女はぼんやりと考えていた。息子に対して無関心になったつもりは、彼女にはない。それどころか過干渉になってはいないかと、常にその方が心配だった。だが、いざとなると、息子のことがまるでわからない。何を考えて、夜中に東尋坊を目指したのか、どうして家に帰りたくないのか、受験に対してどう考えているのか——何もかも、分からないことだらけだった。心細い。夫がいてくれたら、男親として息子に接してくれたらと、心の底から思う。

「ああ、ちょうど見ころだな。」ふいに運転手が声を出した。何のことかと思ったら、左手に水仙が咲いているという。見ると確かに、道路の脇の急な斜面に黄色い花が見えた。「あれ、水仙ですか？全部？」「ここから先、( a ) しばらくね。」海沿いの道は、そのまま水仙の道だった。どこまで行っても濃い緑の葉が茂り、水仙は可憐な姿で咲いている。「面白いもんで、摘んで持って帰ると、さ

ほど匂わないんだそうです。中には根っこから掘り起こして、自分の家の庭に植える人もいるそうだけど、やっぱり、それほど匂わないって。」この日本海に面した急斜面で、風雪に耐えて、( b ) この甘い香りを放つのかと、彼女は不思議な気持ちになった。

「人間がいいと思う環境と、違うんだ。」息子が、妙に納得した表情で呟いた。さつきよりは、幾分穏やかな表情をしている。「I」ふと、彼女に向って言っているのかと思った。——まさか。この子は今まで一度だって、反抗したことなんか無い。嫌がったことも無い。だが、何の不満も抱いていなければ、家出など企てる道理がない。( c ) 彼女は、親として望ましいと思われるすべてを、息子に注いできたつもりだったが、それでは足りなかったということなのだろうか。

甘い香りを味わい、陽光を受けてきらめく日本海を眺めながら、いくつかのトンネルを抜け、やがてタクシーが着いたのは、『漁火』という、共同浴場のような場所だった。まさしく日本海に面した露天風呂は、立ち上がる湯気を海風に吹き飛ばされながら、心地よい湯をこんこんと湧かせていた。その湯船に身体を浸し、( d ) 穏やかに見える日本海を眺めながら、彼女は初めて、深々と息をついた。——あの子の中で、何が起こっているんだろう。重苦しい憂鬱が、疲れた頭の中で黒い雲のように広がっている。分からない、まるで分からなかった。どうすれば良いのかも。

やっと風呂から上がると、タクシーの中では運転手がシートを倒して昼寝をしていた。息子は道端に立って、海を見つめている。彼

も十分に温まったのだろう。顔色が良くなったようだった。「どうして、お父さんは来なかったの。」彼女が近寄ると、息子がふいに呟いた。「だって、会社があるじゃないの。」俺、もう何カ月も、顔も見えないよ。」彼女は黙って息子の横顔を見つめた。「俺のことなんか、もうどうでもいいのかな。」Ⅱ 夫が留守がちなのは何も昨日今日、始まったことではない。息子だって、そういう生活にはどうに慣れきっているはずだとばかり思っていた。だが、息子は彼女よりも、むしろ夫に迎えに来て欲しかったのではないかということに、初めて思いが至った。「お父さんに、何か話したいことがあった？」出来るだけ穏やかな声で話しかけてみた。無言。「お母さんじゃ、駄目なことなの？」やはり、息子は答えない。しばらく沈黙が続いた。② 身体の芯が温かい。それだけが、今の救いのように感じられた。「じやあ、お父さん、呼ぼうか。」ずい分、長く黙っていた後で、彼女は思いきって言ってみた。③ それまで、まるで反応を示さなかった息子が、初めて振り返った。試すような目つきで、彼女を見つめている。だが、彼がそれを望んでいるのなら、そうするべきだ。第一、今、息子の信頼を得られなければ、息子はもう、心を閉ざしてしまいそうな気がする。

「迎えに来てくれるまで、帰りませんって。普段、私たちのことなんか放つたらかしにしているんだから、それくらいしてくれたって、いいわよねえ？」息子の瞳が迷っているように揺れた。かなり危険な賭けかもしれない。夫が本当に来てくれるかどうかは、半々だという気がする。いや、四分六分で来ない可能性の方が高いだろ

う。だが今、その賭けに出なければ、息子の気持ちは離れ、彼が自分の中で何かを捨て去ってしまう確率は百パーセントだ。それだけは食い止めなければならなかった。「——来るかな。」Ⅲ 「だから、来てくれるまでは帰りませんって。お母さんも一緒の、家出っということね。」④ 息子の瞳が、初めて悪戯っぽく揺れた。そう、確かにこの子は小さな頃は、なかなかの悪戯っ子だった。あの頃の、生き生きとした瞳を、また見たいと思った。身体ばかり大きくなったから、つい、もう一人前のような気がしていたが、彼はまだまだ、形の定まらない過程にいる。今から悟ったような、静かな瞳を持つ必要など、あるはずがない。

「風呂の中でタクシーの運転手さんが言ってたけど、今は越前がが一番美味いんだって。」Ⅳ 「かにねえ。そういえば、お腹すいたわね。」当たり前の話だった。冬の陽は、もう少しずつ傾き始めている。風呂に入ったお陰で、空腹に拍車がかかっていた。⑤ 羽目を外しているわけではない。むしろ、これは小さな反乱だ。彼女は小走りにタクシーに近づき運転席のドアを叩いた。⑥ ぐっすり眠っていたらしい運転手は、驚いたように目を開けた。彼女は、息子を急ぎ立てて再びタクシーに乗り込んだ。走り出すと再び水仙の香りがする。冬の陽射しが、海を金色に輝かせていた。「あなたのお陰で、久しぶりの家族旅行になるかもね。」⑦ 不安を振り払うように、彼女は息子に笑いかけた。息子も初めて、口元を微かに歪めた。

雪が溶けて黒く濡れた車道は、陽の光を浴びて金色に輝いていた。これが明るい未来に続く道であって欲しいと願いながら、彼女は水

仙の香りを味わっていた。

(乃南アサ「越前海岸」から)

(注) 東尋坊とうじんぼう 福井県にある、投身自殺した僧の名に由来する崖

問一 ( a ) から ( d ) に入る語の組み合わせとして

して適当なものはどれか。

- ア 「a ずっと b 初めて c 少なくとも d 意外に」  
イ 「a 意外に b ずっと c 初めて d 少なくとも」  
ウ 「a ずっと b 意外に c 少なくとも d 初めて」  
エ 「a 意外に b 少なくとも c ずっと d 初めて」

問二 次の一文が入るところは、本文中の「Ⅰ」から「Ⅳ」

のどこか。適当なものを後から選べ。

胸が痛くなる言葉だった。

- ア 「Ⅰ」 イ 「Ⅱ」 ウ 「Ⅲ」 エ 「Ⅳ」

問三 ① まさか。とあるが、その時の「彼女」の心情として最も適当

なものどれか。

ア 家出をするほど「息子」を追いつめてしまい、親として失格である。

イ 厳しい環境に耐えてこそ生きる意味があるのだから、「息子」

の思うようにさせてあげよう。

ウ 自分のひとりよがりな行為によって、「息子」の人生を台無しにしてしまうところだったのだろうか。

エ 「息子」を手助けしようと思ってやっていることが、自己満足にすぎないものだったのだろうか。

問四 ② 「じゃあ、……言ってみた。とあるが、その時の「彼女」の

様子として適当なものはどれか。

ア 「息子」の家出の原因が夫にあることが分かり、なんとしても「夫」に来てもらわなければならないと思っている。

イ 「息子」の気持ちを押し量る中で、「夫」に来てもらえたらこの状況が何とかなるのではないかと思っている。

ウ 自分に感謝の気持ちも持たず、馬鹿にした態度を取り続ける「息子」を挑発しようとしている。

エ 多忙な父親のことまで持ち出して自分を拒絶する「息子」に、いらだちを覚えて投げやりになっている。

問五 ③ ④ 試すような……見つけている。から息子の……揺れた。

に至る「息子」の心情の変化を説明したものと最も適当なものどれか。

ア 最初は母親の発言が本心から発せられたものかどうか見極めようとしていたが、今はその内容が信用できないものであっても、母親の言う通りに行動しようという気持ちになっている。



イ 最初は母親の発言は自分を連れて帰るための口実だと思っていたが、母親の様子を見ているうちに誠意を感じるようになり、自分の軽率な行動を反省する気持ちになっている。

ウ 最初は母親に意地を張って反発していたが、今は心から自分のことを思ってくれる母親の懸命な様子に、母親を憐れむ気持ちになっている。

エ 最初は母親を疑っていたが、その発言に母の思いの強さを感じるようになり、母親とともに父親を困らせてやろうという気持ちになっている。

問六 ⑤ 拍車がかかってとあるが、「拍車がかかる」の本文中での意味として適当なものどれか。

ア 促進される イ 我慢できなくなる

ウ 慣れる エ 苦しめられる

問七 ⑥ 小さな反乱とあるが、その説明として最も適当なものどれか。

ア 今まで通りの家族関係を保とうとする行為

イ 「夫」をあわてさせるような行為

ウ 「息子」の気持ちをつなぎとめるための行為

エ 家族の関係を壊してしまう行為

問八 ⑦ 口元を微かに歪めた。とあるが、この時の「息子」の様子として適当なものどれか。

ア 家族で旅行できる楽しさに胸が躍る気持ちであるが、その気持ちを母親に悟られないように気を付けている。

イ 自分のことを一番に考えてくれる母親の深い愛情を感じ、感謝の思いがこみ上げてきている。

ウ 父親が来るかどうかは分からないが、母親に対するわだかまりが溶けて素直な気持ちを取り戻しつつある。

エ 勉強から解放されるのはうれしいが、自分と母親を追い詰めた父親のことを苦々しく思っている。

問九 本文における表現と内容の特徴についての説明として適当でないものはどれか。

ア 登場人物の内面描写を少なくし、短い会話文によって「彼女」と「息子」の気持ち繋がっていきさまが描かれている。

イ 「彼女」と「息子」との関係が修復する過程を、越前海岸の自然に投影させて巧みに表現している。

ウ 「運転手」という第三者を登場させることで、「彼女」と「息子」との関係が変化していく転機をうまく作り出している。

エ 一人称ではなく「彼女」という三人称で語りによって、主人公の内面を客観的に描いている。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

平安時代の武将、源頼義・義家親子は安倍貞任や宗任ら豪族を攻め続け十二年。雪が降るある日、双方は東北の衣川で戦っていた。

貞任(麻エラレナクナツテ)はたへずして、つひに城の後より逃れ落ちけるを、義家、

衣川に追ひたて攻めふせて、「きたなくも、うしろをば見するものかな。しばし引きかへせ。物いはん。」<sup>(a)</sup>といはれたりければ、

貞任、見返りたりけるに、「衣のたてはほころびにけり」といへりけり。貞任(馬具ヲユルメテ)くつばみをやすらへ、頭をふりむけて、「年をへし

帰りにけり。さばかりのたたかひの中に、やさしかりける事かな。<sup>(b)</sup>」<sup>(c)</sup>と付れたりけり。その時義家、

「古今著聞集」から

(注1) 衣のたては……：和歌の下の句

(注2) 年をへし……：和歌の上の句

問一

(a) 物いはん、さばかりの本文中での意味はそれぞれどれか。  
(1) 物いはん

ア 確かに言ったぞ

ウ 何も言うことはない

(2) さばかり

ア これほど残酷な

ウ これほど激しい

イ 言う必要がある

エ 言いたいことがある

イ これほど立派な

エ これほど見苦しい

問二

に入る言葉として適当なものどれか。  
ア 心    イ 糸    ウ 雪    エ 頭

問三

うしろをば見するものかな。の現代語訳として適当なものはどれか。

ア 敵に背を向けて逃げる気か。    イ 味方を背にして逃げる気か。

ウ 私の背後に回って攻める気か。    エ 敵の背中を狙う気か。

問四

いはれたりけれとあるが、A「誰から」B「誰へ」の敬意が込められているか。その組み合わせとして適当なものはどれか。

ア 「A 義家    B 貞任」    イ 「A 語り手    B 義家」

ウ 「A 貞任    B 義家」    エ 「A 語り手    B 貞任」

問五

やさしかりけるとされているものとして適当なものはどれか。

ア 最後の一戦に必死に挑もうとする貞任の振る舞い

イ 味方を逃がすために一人立ち止まった貞任の振る舞い

ウ 激しい戦いの中でも句を交わし合う貞任と義家の振る舞い

エ 戦いのさ中、再戦を誓う歌を詠んだ義家の振る舞い

## 四

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

1

澄みわたった夜空に、天空を取巻いて川のように見える灰白色の条帯で、恒星の集合より成っている。北半球では年中空にかかっているが、春は地平に沿って低く、冬は高いが光は淡く、夏秋の交にほとんど地平線と水平になって天頂に来るので、とくに目立つ。

七々と関連した伝説を持っていて、『2』以来、たなばたつめと彦星との年に一度の逢瀬にちなんだ歌が詠まれている。たとえば『2』に、「七夕」の題詠が二〇〇〇から二〇九七まで無名の歌として並んでいる。それは連歌時代にも変わらない。

天の川の美しさを、七夕との連想なしに詠み出したのは、俳諧時代になってからと言ってよい。「荒海や佐渡に横たふ天の川」(芭蕉『奥の細道』)も、七夕との関連で詠んだのだが、詞の上では七夕から全く離れている。

近代俳句もその延長線上に作られていて、七夕伝説など連想して作る作者は皆無に近いであろう。

(山本健吉「基本季語五〇〇選」から)

(注1) 条帯＝細長い帯状のもの

(注2) 七夕＝天帝の怒りを買って離れ離れになった「たなばたつめ」と「彦星」が一年に一度だけ会える日。旧暦七月七日(現在の八月七日頃)

問一 灰白色、淡、皆無、の読みをひらがなで書きなさい。

問二 1 には、この文章で説明されている季語が入る。その

季語と季節を、それぞれ本文中から抜き出して答えなさい。

問三 ① 交の意味を説明した次の文の空欄に入る語を、ひらがな三字で答えなさい。

季節の「 」。 「目のころのこと。」

問四 2 には、奈良時代の末に成立した日本最古の歌集名が入る。「ますらをぶり」という特徴を持つこの歌集の名前を漢字で答えなさい。

問五 ② 2 が指している部分を、解答欄の「こと」につながるように、本文中から三十五字以内で抜き出し、その最初と最後の三字をそれぞれ答えなさい。

問六 助動詞③の意味・用法を、例を参考にして漢字で答えなさい。

(例) 作られていて……受身(の助動詞)

